

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 28 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370353

研究課題名(和文) 明治期ドイツ学の観点より考察したる森鷗外翻訳作品の史的研究

研究課題名(英文) A Historical Study of Translation Works by Mori Ogai Examined from the Viewpoint of Meiji Era German Studies

研究代表者

中 直一 (Naka, Naoichi)

大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・教授

研究者番号：50143326

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：四年にわたる本研究において、以下の四点が明らかになった。第一に、鷗外の翻訳が、青年期から晩年にかけて、比較的自由的な翻訳を行う傾向から、学問的に厳密な翻訳を行うように、次第に変遷していった実態が明らかになった。第二に、鷗外の「翻訳」観の変遷が、明治期ドイツ学の質的变化の中で考察し得る事が明らかになった。第三に、鷗外の翻訳の底本となった鷗外手沢本を収集することにより、鷗外のドイツ語読解と訳文構成の相関を解明し得た。そして第四に、青年期の鷗外の翻訳技法が、原文の配語法をある場合はかなり忠実に踏襲し、またある場合は逆に大胆に日本語化する等、現代に通用する技術を含むものであることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this study over four years, the following four points were clarified. First, the translations of Mori Ogai revealed a gradual transition from the tendency to perform relatively free translation of his young years to the tendency to conduct academically strict translation of his later years. Secondly, it became clear that the change of Ogai's view of "translation" can be considered from the perspective of the qualitative change in German studies of the Meiji-era. Thirdly, by collecting the copies of books that Ogai himself collected in Germany and used as the base of his translation, I could clarify the correlation between his comprehension of German and the composition of his translation. And fourthly, it became clear that the technique of the translations in his young years includes technologies that can be applied to modern times, such as fairly faithfully following the word order of original language or, in some cases, making bold translations.

研究分野：人文学

キーワード：ドイツ学 森鷗外 翻訳 明治 異文化理解

## 1. 研究開始当初の背景

鴎外の翻訳については、従来様々な研究が進められてきた。だがその多くは、鴎外の翻訳作品の「文学的価値」を考察したり、あるいはその語彙使用を検討するものが中心であった。これらは、いわば「鴎外の翻訳を、鴎外文学の内側から見る」という方向であるとと言える。

本研究の研究代表者は、明治期を中心とする「ドイツ文化の日本における受容」を研究テーマとして、諸々の研究を進めてきた者である。明治期、とくに初期のドイツ文化の受容やドイツ文学の翻訳について研究を進める途上で明らかになったのは、「明治初期においては、厳密・正確な翻訳より、むしろ大胆な改変をともなった自由な翻訳が好まれた」ということである。

鴎外晩年の翻訳は、たとえば有名な『ファウスト』翻訳に見られるように、極めて厳密・正確で、かつ文学性にあふれるものである。だがこれに対し、青年期鴎外の翻訳は、むしろ非常に自由なものであり、原作の一部をカットしたり、原作にはない文章を書き加えたり、はては、信じられないような誤訳さえ含まれる。

本研究の研究代表者は、明治ドイツ学研究の観点から考察をすすめ、鴎外における上記の翻訳姿勢の変遷は、鴎外の個性というより、むしろ明治ドイツ学の在り方そのものを反映した者であるという予測のもとに、本研究を開始した。

すなわち本研究の研究代表者が今回の研究を開始する際の背景には、明治ドイツ学研究の立場から鴎外の翻訳を見ることが必要である、という認識があった。明治期において、ドイツ学の在り方は大きく変化したが、ドイツ学の変化の在り方と鴎外の翻訳観の変化に共通性があるのではないか、という問題意識が、今回の研究の出発点をなしたのである。

## 2. 研究の目的

本研究は次の4つの目的を有する。

(1) 鴎外の翻訳が、青年期から晩年にかけて、比較的自由的な翻訳を行う傾向から、学問的に厳密な翻訳を行うように、次第に変遷していったという仮説を実証する。

(2) 鴎外の「翻訳」観の変遷を、鴎外個人の問題として捉えるのではなく、明治期「ドイツ学」の質的变化の諸相の中で考察する。

(3) 翻訳の底本となった鴎外手沢本を徹底的に収集し、鴎外のドイツ語読解と訳文構成の相関を探る。

(4) 鴎外の翻訳技法がどのような点で現代に通用するかを解明する。

上記の4つの研究目的のもとに、本研究においては、以下の(A)および(B)の副次的研究目的も設定した。すなわち、

(A) 森鴎外の翻訳家としての側面に着目する。

作家としての森鴎外についての研究は枚挙に暇なき状態である。また鴎外の翻訳作品を、作家・森鴎外の観点から考察する研究書も多い。本研究においては、鴎外の翻訳作品を、作家としての森鴎外でなく、「翻訳家としての森鴎外」の観点から考察する。すなわち本研究においては、鴎外の翻訳作品を、明治期の他の翻訳者たちの翻訳観と対比しつつ研究することを目的とする。

(B) 森鴎外の翻訳を、「明治期ドイツ学」の枠組みの中から考察する。

これは、上記の本研究目的本研究(2)の系に属するものである。すなわち、鴎外の翻訳活動を、明治期の「ドイツ学」との連関で考察する、というものである。今日ではもはや死語となって久しい「ドイツ学」であるが、この学問分野は明治時代から大正時代にかけて、ドイツに関する幅広い学問領域を指し示すものであった。単にドイツ文学研究に止まるのではなく、ドイツの法律学やドイツ経済学の分野をも包摂する「ドイツ学」全体の中で、鴎外の翻訳の営為を検討するのが本研究の二つ目の副次的目的である。

## 3. 研究の方法

本研究を推進するにあたり、4年計画で研究を遂行する研究行程を立案し、この行程に従って研究を行う、という方法を採用した。

【第1年度 青年期鴎外の訳業と明治初期「乱訳」時代との相関】

第1年度は、森鴎外がドイツから帰国し、作家として、また翻訳家として活躍しはじめた明治20年代を扱う。この時代は、日本でようやくドイツ学に興味向けられた時期であるが、まだ学問としての「ドイツ文学研究」は成立する以前であり、翻訳についての考え方も、人により実に様々であった。

この時代の翻訳は「乱訳」の時代と評されるが、青年期の鴎外は 研究代表者の予備的研究に依れば こうした時代の中であって、翻訳に対して全く異なる2つの態度を示したと思われる。第1年度は、青年期鴎外の2つの翻訳観を資料により実証する計画を立案した。

【第2年度 過渡期の鴎外訳業と翻案が果たした役割】

第2年度では、鴎外40才台に注目する。この時代において、鴎外の翻訳観は過渡期にあると目される。つまり、青年期の翻訳態度が変化し、この時期になると、自由的な翻訳を差し控えて、厳密な翻訳法を追求する一方、原文にない語句を自由奔放に追記する手段として「翻案」という形を採用した時期であると目されるのである。

### 【第3年度 講壇ドイツ学の成立と円熟期 鷗外の翻訳観】

鷗外晩年の翻訳は、『ファウスト』に見られるように、いまなお多くの読者を持つものであり、かつ厳密正確な訳を目指すものが多い。本研究の研究代表者の如く、鷗外の訳業を日本ドイツ学史全体の中に位置づけて考察する立場からすれば、鷗外訳『ファウスト』は、日本の各大学で独文学講座が設立され、いわゆる独文学者が数多く輩出した時期の所産であり、ひとり森鷗外の才能のみに帰すべきものではなく、明治ドイツ学の最後の輝きが、大正時代に結実したものであると考え得る。

第3年度は、鷗外晩年の訳業に注目し、この時代の鷗外の翻訳技法を、鷗外個人の超絶的翻訳技法と見るのではなく、明治ドイツ学の集大成との観点から考察する計画を立案した。

### 【第4年度 明治期ドイツ学の変遷と鷗外訳業の質的变化についての総合的考察】

第1年度から第3年度までは、鷗外の訳業を3つの時期に分けて考察するものであるが、第4年度は、それを通時的に考察する。その際の導きの糸となるのは、教育制度・教育体制の変遷である。すなわちドイツ語を学ぶ人の数が非常に少なかった鷗外の青年期と、逆に、旧制高等学校が各地に設立され、また大学において独文学講座が設置された鷗外晩年の時期では、鷗外の翻訳を読む読者のドイツ語原文に対する関心が大幅に変化したと考えられる。第4年度は、まずドイツ語原文への関心の高まりを教育制度の変化の相から捉え、また鷗外の訳業の変遷を教育制度・教育体制の変遷の面から再考察する。

また第4年度は、翻訳批評家にも着目する。教育制度が整備され、ドイツ語を学ぶ人の数が増えるにつれて、ドイツ文学の翻訳を、その原典から読みうる読者が増え、さらには鷗外の翻訳ぶりを批評し、また鷗外の誤訳を断罪する批評家も登場するに至った。鷗外自身、自分の誤訳を指揮するドイツ学者が増えつつあることを気にかけていたふしがある。本研究の研究代表者は、誤訳探しを事とする翻訳批評家が登場するに至って、鷗外が自己の翻訳態度の軌道修正を試みたのではないかと推測した。第4年度の第2の研究計画は、鷗外の翻訳観の変化を、翻訳批評家の登場との関連から考察する、というものである。

## 4. 研究成果

4年にわたる研究期間において、次の(1)から(3)について、研究の成果を公表した。

なお引用のページ付けは、鷗外訳「新浦島の翻訳底本は、Irving, Washington, Rip van Winkle. In: Washington Irving's Skizzenbuch. Uebersetzt, mit Biographie und Anmerkungen herausgegeben von Karl

Theodor Gaedertz, Leipzig (Reclam) o.J.により、鷗外訳「新浦島」は『鷗外全集』第1巻(岩波書店、1971年)によった。

(1) 鷗外の翻訳技法のうち、翻訳底本の語順を訳文にどのように鷗外が活かしたか、ということについては、底本の長々しい修飾語句、あるいは関係文に代表される長い文章を、適宜底本の語順、あるいはその文章配列を生かしながら邦訳する、という技法を見せていたことが解明された。その際鷗外は、底本の配列を生かすのみならず、必要に応じて、後ろにある語句のエッセンスを訳文の前の方に示すかの様に配したり、あるいは後ろに配する筈の文言を敢えて前に配したり等と、単純一様でない訳しぶりを見せている。

たとえば鷗外は初期の翻訳である「新浦島」において、底本で *Es war ein untersetzter, vierschrötiger alter Bursche, mit dichtem buschigen Haar und grauem Bart. (S.65)* となっている箇所を、「丈は低く、力のありさうな老人、髪は濃くて箒の様になり、髭は灰いろです。」(p.174)と訳している。この訳文が登場するのは、小説の中程、竜宮城に相当する洞窟へ主人公リップを誘う謎の異国人が現れる部分である。仮に底本のドイツ語を、名詞 *Bursche* (やから)への修飾関係を原文に忠実に訳したとしたら、「濃くてもじゃもじゃした髪で、灰色の髭をした、背の低いがっしりした老人であった」となるところである。しかしこのような訳文だと、「老人」を形容する語句があまりに長すぎる。そこで鷗外は、底本の前半部(*Bursche*まで)を先に訳し、底本の後半部(*mit*以下)を追加的に訳す、という処理を行った。底本では名詞 *Bursche* に対し、前から形容詞が三つ修飾し、かつ後ろから長々しい前置詞句が修飾するという構造になっているのだが、鷗外は名詞の前後の修飾語句全てを一気に名詞に掛けて訳すのではなく、むしろ底本の語順の方を訳文に反映させる訳出法を採用した。そのことにより、鷗外は日本語が生硬になることを避けたのである。なお底本の *buschig* (もじゃもじゃした)を鷗外は「箒の様になり」と訳し、また *vierschrötig* (がっしりした)を「力のありさうな」と訳しており、訳語をかなり工夫している。別の言い方をすれば、少々大胆に訳している

が、この点においても青年期鷗外の訳文の特徴がうかがえる。

いずれにせよ、鷗外は底本における名詞への修飾関係を、そのまま直訳的に邦訳して生硬な訳文となることを避けるために、むしろ底本の語順を生かして邦訳を試みた。すなわち、底本において名詞を後ろから修飾している成分(前置詞句)を、邦訳においても、名詞の後ろに配し独立せしめたのである。

こうした鷗外の訳しぶりは、翻訳に従事する者にとって、色々と参考になる。ただし注意しなければならないのは、鷗外がいついかなる場合でも底本の語順を邦訳に生かそう

としたわけではない、ということである。上には関係代名詞を含む文章を二つに切り分けた実例を紹介したが、鷗外の訳には、関係文を後ろから前に掛けて訳し、結果的にかなり長い邦訳となるというケースも存在する。修飾語句に関しても、底本の語順を生かそうとした場合もある一方、底本の語順とはかなり異なる訳し方を見せている場合もあると云う。

(2) 鷗外はまた、底本における過去形を、邦訳で現在形にすることにより、訳文が単調になることを避けているが、その際みせているのが、強調構文風の文体を訳文に採用するという技法である。すなわち鷗外は、底本では強調構文になっていない文章を、邦訳では強調構文風に訳すという技法も見せている。これは底本の描写(発想)の流れと敢えて異なる流れを邦訳に持ち込んだものと言える。

たとえば、「新浦島」の底本で *Die Vögel hüpfen und zwitscherten im Gebüsch, und der Aar kreiste hoch in der Luft und trotzte dem reinen Bergwinde.* (S. 67) となっている箇所が、鷗外訳では「木の間には枝から枝に渡つて鳴く小鳥、清い山風に抗つて高く舞ふ青空の鷲ばかり。」(p. 176) となっている。底本では *Vögel* (鳥) と *Aar* (鷲) はいずれも主語だが、鷗外はそれを訳文において文章末に配置している。底本のドイツ語を普通に訳すと「鳥たちは繁みを跳びはねてさえずり、そして鷲は空高く弧を描いて、爽やかな山風にあらがっていた」となる。つまり底本では、「Aは～していた」という形の構文が二回繰り返されるのであるが、鷗外はそのいずれも「～するA(ばかり)」という構文に変形して訳している。

鷗外のこの訳文のすこし前の文章から上記のところまでを、煩を厭わず引用すると、「目が覚めて視れば、また原の緑の岡の上に居ました、丁度あの異い桶を擔うた男を始めて見た所に。目を摩つて見れば、夜は明け離れて、旭が麗かに照つて居ます。木の間には枝から枝に渡つて鳴く小鳥、清い山風に抗つて高く舞ふ青空の鷲ばかり」となっている。ちなみにこの部分の現代語訳を見ると「目をさますと、あの老人が溪谷を登って来る姿を初めて見た緑の丘にいたのだ。眼をこすってよく見ると、陽の輝いている朝であった。小鳥が、繁みのなかをとび歩きながら、さえずっている。鷲が、澄んだ山の微風を胸で切って、空高く輪を描いて飛んでいた」となっている。この訳自体、アーヴィングの原文(英文)で「*The birds were hopping and twittering ...*」と過去進行形を使用している箇所を、「とび歩きながら、さえずっている」というように現在形を使用しており、過去形の羅列を避ける配慮が行われているのだが、鷗外の訳文は、そうした配慮をもっと大々的に行っていると言えよう。すなわち初学者風に訳した場合に「彼は……丘の上にいた」「彼は目をこすった」「朝だった」「鳥

が飛び跳ねてさえずっていた」「鷲が弧を描いて、風にあらがっていた」というように過去形が続く訳文が想定されるが、鷗外はその様な過去形の羅列を避け、強調構文風に変形した訳文を採用することによって、過去形と現在形をミックスした文章を読者に提供したと考えられるのである。

物語の文章である以上、底本の動詞はほとんど過去形であるが、邦訳においても過去形ばかりを使用した場合、「～した」という語調の文章が延々と続くこととなり、日本語の文章としては、多少とも味わいに乏しくなるきらいがある。現代の翻訳者でも、たとえば「～した」という邦訳文の羅列を避けるため、たとえば「～したのである」という訳文を採用する等、単調さを避けるための工夫をすることがあるが、鷗外の場合は、それを強調構文の採用という形で行ったものと考えられるのである。

(3) 鷗外の訳文の中には、明治日本の読者に対し、異文化である欧米の文物を、どのように翻訳において処理したら受容しやすいか、という異文化受容の観点から、興味深い翻訳実践が見られる。異文化理解には様々な次元がある。たとえば、日本人が海外に行き、現地の文化に接して行く理解の営みや、逆に来日した外国人のもつ行動を現地人である日本人が解釈する理解などが一般的な「異文化理解」であろう。単純化していえば、A文化に属する個人aがB文化を理解するという二項の関係になる。ところが、翻訳の場合、翻訳者は、原文テキストと翻訳読者の間をつなぐ仲介者である。つまりA文化に属する原文テキストaを、B文化に属する読者bに媒介するxが翻訳者の位置づけとなる。仲介者xはA文化とB文化の両方に精通し、かつB文化に属するbがA文化の状況についての予備知識をさほど持たないことを前提に訳文を作成する。そこには、bの予備知識の在り様をxが十分に忖度した上での訳文作成の営みがある。本研究の研究代表者は、翻訳者のこのような営みを「文化変容」と位置づけて分析を進めた。

たとえば鷗外の「新浦島」では、次のような例が見られる。すなわち底本で *... obgleich sein väterliches Erbgut unter seiner Wirthschaft Acker für Achker abgenommen hatte, ...* (S. 60) となっている部分を、鷗外は「先祖から譲り受けた田は、年々に減つて仕舞ひ……」(p. 170) と訳している。注目すべきは「*Acker für Achker*」の部分である。ここは、怠惰な主人公リップのもとで父祖伝来の土地がどんどん荒れて、牧畜に適した場所が次第に狭くなってゆくという状況を、「1エーカー、1エーカーと減り」という風に表現した部分である。鷗外はこれを「年々に」という風に、時の経過を表す表現に訳し換えている。

性急な批評者なら、これを誤訳であると即断しかねない。しかし本研究の研究代表者は、

これこそ鴉外の異文化理解のありようを如実に示すものと考えている。仮にこの部分を「1エーカー、1エーカーと」、あるいは「1エーカーごとに」と訳しても、当時の少年読者はおろか、大人の読者にとっても、「エーカー」が何を意味するのかが理解しづらく、読書の流れがこの部分で阻害されかねない。さりとして、広さを表す表現であることを日本語訳に生かそうとして、仮に「一反、一反と」、あるいは、「一坪ごとに」等と訳したとしても、この箇所まで独立戦争前後のアメリカの異国情緒を漂わせていた訳文の中に、いきなり日本的な広さの単位が登場することとなり、いわば木に竹を接いだような形になる。シェイクスピアを歌舞伎風に訳した初期の坪内逍遙のように、舞台も登場人物名もはじめから日本に置き換えた翻案的翻訳をなしたのならいざ知らず、「新浦島」のように舞台設定も人物名もすべてアメリカのままに翻訳を進めている翻訳作品においては、「エーカー」という広さの単位の部分のみを日本化することは、読者に却って違和感を与えるものとして、避けざるを得なかったのではないか。

森鴉外は「新浦島」において、単に「横のものを縦にする」といった翻訳態度を見せたのではなく、明治の読者の欧米文化理解の水準を意識し、かつ少年読者の異文化理解の在り様に配慮して、訳語の選択に工夫を凝らし、あるいは注釈的な説明を訳文の中に組み入れたものと考え得る。鴉外の訳文の中には、現代の読者にはもはや不必要と思われる注釈的付加もある。しかし研究代表者としては、現代の高みから過去の翻訳を見下すという態度を戒め、むしろ、異文化理解のための媒介的文化変容は、その時代その時代に適した形であらわれる、という視点で鴉外の翻訳を把握したいと考えるものである。

論文発表の形には至らなかったが、4年の研究期間において、研究代表者はさらに次の研究成果を得た。

(4) 明治期における独逸学の進展については、研究代表者が従来の研究で得てきた以下の知見を、鴉外の翻訳観の変化の観点から、再度点検・確認を行った。

明治期の独逸学の発展については、まず1883(明治16)年、「独逸学協会学校」が設置されたことが注目される。これを契機に、とくに文部大臣・井上毅の主導で、独逸学が推進されたと目される。井上毅は、自由民権運動に対抗するものとして独逸学を位置付け、<独逸学は英学と全く別種の思想を持つものである>という考えのもとに独逸学を鼓吹した。

1886(明治19)年に新たな中学校令が出され、外国語に関し、第一外国語は通常英語、第二外国語は独語もしくは仏語を学ぶことになっている。たとえば「第一高等中学校」(旧東京大学予備門)のカリキュラムにおけ

る授業時数を見ると、第一外国語(英語)が4、第二外国語(独語もしくは仏語)が5となっており、第二外国語の方が時間数が多くなった。

森有禮文部大臣在任時の1886(明治19)年、第一高等中学校においては、1891(明治24)年以降の入試の外国語科目を専ら英語に限る旨の予告が出されたが、これは結局実現に至らなかった。

1894(明治27年)に「高等学校令」が出され、従来の高等中学校は高等学校と改称された。いわゆるナンバーズスクールが登場したのが、このときであり、旧制高等学校でドイツ語の学習がさかんになった。それにともない、ドイツ語を読める日本人の数が漸次増加した。

1895(明治28)年の「第一高等学校大学予科入学志望者心得」によると一高卒業後、大学の文科(つまり帝国大学文科大学)の英文学科に進学を希望するものは、あらかじめ一高で英語を第一外国語として選択し、仏文科に進学を希望するものは、あらかじめ一高でフランス語を第一外国語として選択すべしとしているのだが、大学文科の残る学科(すなわち独文学科、哲学科、国文学科、漢学科、国史科、史学科および博言学科)に関して、あらかじめ一高でドイツ語を第一外国語として選択することを求めている。

1900(明治33)年には「高等学校大学予科学科規程」が改正されたが、同規程によれば、「従来は外国語に第一・第二の区別を設け、第二外国語は随意科として生徒に課したが、改正の規程においては、英語・独語および仏語の中に就き、二種を選ばしめることとなった」(文部省『学制百二十年史』[ぎょうせい、1992年] pp.180-181)。すなわち、外国語における第一・第二の区別がついになくなり、この時点で独仏両語は、英語と並ぶ位置づけを得るに至った。

鴉外の訳業が発表された時期は、まさにこのように、高等教育機関におけるドイツ語学習の伸展の時期と重なっているものであり、そのような中で、鴉外の訳業の変遷も考察されるべきであると考え得る。

(5) 4年の研究期間において、明治期独逸学の進展状況を現物資料で確認するため、以下のドイツ学関係図書をPDF化した。

《2014年度PDF化図書概要》

加藤正之訳『日耳曼大宰相比斯馬克政略起原』(明治10年) 平塚定二郎『獨逸文法階梯 前編 辭學』(明治16年) セーフエル(小山篤叙)『獨逸文典直譯 文章論 全』(明治16年) ヘステル(井上蘇吉訳)『獨逸學獨案内 全』(明治16年) 原口隆造『獨逸語階梯 全』(明治17年) 橋本龜太郎『和文獨譯獨逸作文獨案内』(明治17年) 草鹿丁卯次郎『獨和會話篇』(明治19年) ゲーテ(井上勤訳)『禽獸世界狐之裁判』(明治19年) 平塚定二郎『獨逸文法階梯說明 前編之部』(明治19年) ヘステル『第一讀本獨案内』(明治

19年)、ハウフ『砂漠旅行亞拉比亞奇譚』(明治20年)、ウエンツケ『哲學階梯』、原口隆造『改正増補獨逸小文典』(明治22年)、原口隆造『改正増補獨逸文典略』(明治22年)、北村三郎『日耳曼史全』、プリエンクリュー『獨逸賢嬢 オチリア艸紙』(明治24年)、『第二國民小説』(明治24年)、赤司繁太郎『烈眞具全』(明治25年)、徳田秋江編『シルレル物語』(明治36年)、アイヘンドルッフ『なまけもの』、平塚定二郎『平塚氏獨逸文法解』(明治27年)、大村仁太郎他『改訂獨逸文法教科書 前編』、ゲーテ(久保天随訳)『ゑゝるてる』(明治37年)、ゲーテ(高橋五郎訳)『ファウスト』(明治37年)、登張竹風訳『賣國奴』(明治37年)、葉山萬次郎『獨逸國民文學史全』(明治37年)、等。

《2015年度PDF化図書概要》

『獨逸ヘルバルト教育學』(明治28年)、『新撰和獨字彙』(明治28年)、『エンゲリン第一讀本獨學自在』(明治30年)、『獨逸語入門全』(明治30年)、『獨逸學捷徑全』(第四版)(明治31年)、『外国語教授法全』(明治34年)、青木昌吉『邦語獨逸文典』(明治34年)、大村仁太郎/フロレンツ『獨逸階梯全』(明治35年)、高橋金一郎『獨逸文典-文論』(明治36年)、渡邊修二郎『初學自修獨逸語速成』(明治36年)、山方香峰『世界人豪の片影』(明治39年)、青木昌吉『實用獨逸文典全』(明治40年)、ハウプトマン(登張・泉訳)『沈鐘』(明治41年)、原弘毅『獨逸戯曲物語』(明治41年)、二宮哲三『獨逸文法原理(下)』(明治43年)、『獨逸語初歩』第一卷(明治44年)、ワグネル(秋元蘆風譯)『樂劇タンホイゼル』(明治44年)、ゲーテ(町井正路訳)『ファウスト』(明治45年)等。

《2016年度PDF化図書概要》

獨逸文學叢書 01 グリルバルツェル『金羊皮』、獨逸文學叢書 02 レッシング『ミンナ・フォン・バルンヘルム』、獨逸文學叢書 03 ルードウィヒ『世襲山林監督』、獨逸文學叢書 06 シルレル『オルレアンの乙女』、獨逸文學叢書 07 グリルバルツェル『ザッフォー』、獨逸文學叢書 08 クライスト『ペンテジレーア』、獨逸文學叢書 09 メーリケ『ブラークへの旅路のモーツァルト』、獨逸文學叢書 11 レーナウ『レーナウ詩集』、獨逸文學叢書 12 シルレル『シルレル小説集』、獨逸文學叢書 13 ヘッベル『ヘローデスとマリヤムネ』、獨逸文學叢書 14 シルレル『マリア・スチュアルト』、近代劇全集 5 獨逸 ハウプトマン『沈鐘』、『祝典劇』他、近代劇全集 6 獨逸 ビュヒネル『ダントンの死』他、近代劇全集 7 獨逸 ショルツ『影との競争』他、近代劇全集 9 獨逸 ハアゼンクレエフエル『人間』他、近代劇全集 10 獨逸 ヨースト『楽しみの邑』他、近代劇全集 11 獨逸 ウンルウ『プロシアの王子ルイ・フェルディナント』他、近代劇全集 12 獨逸 ホフマンスタアル『チチアンの死』他、近代劇全集 13 獨逸 シェーンヘル『信仰と故郷』他、等。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

中直一、ドームによるケンペル『日本誌』の編集について(3) 第1巻の分析(その3)、ドイツ啓蒙主義研究、第13巻、査読無、2013、1-14

中直一、鷗外訳「新浦島」に見られる翻訳技法(1) 底本の語順をどう邦訳に生かすか、言語文化の比較と交流、第1巻、査読無、2014、31-40

中直一、鷗外訳「新浦島」に見られる翻訳技法(2) 過去形の羅列を避ける技法、言語文化の比較と交流、査読無、第2巻、2015、17-26

中直一、鷗外訳「新浦島」に見られる翻訳技法(3) 異文化理解と文化変容の観点から、言語文化の比較と交流、査読無、第3巻、2016、17-25

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

中 直一 (NAKA, Naoichi)

大阪大学大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：50143326